乙１５テーブル　総評

獨協大学４年　馬場俊弥

参加者

野中（立教３）
原（立教２）
鈴木（東洋３）
道方（青学３）
佐渡（フェリス３）
金澤（明治２）

アッセンお疲れ様です。乙１５テーブルをジャッジしました、獨協四年のばばしです。総評を書くにあたり実際のテーブルと解釈等がズレてしまう可能性がありますがご容赦頂きますようお願いします。

議論の流れ

　野中（立教３）をオピニオンプレゼンターとして、臓器移植推進のオピニオンシートで議論がされた。A.S.Q.エリアでいくつかの質疑応答が行われ NFC エリアへ進む。

NFC で鈴木（東洋３）がアーギュメントを展開した。

内容）現状で臓器移植の数が上昇傾向であるため、プランを採択してもその増加分が我々の政策の影響によるものか、傾向によるものか判断できないため着手すべきではない。

野中、原のカンファメーションによって、プランを採択しなくても傾向は続くという考えや、傾向が続いたとしてもターゲットの害が残るということが判明した。その後、野中が傾向があるだけで、臓器移植が将来下がる可能性を否定できていないっていうダウトを提示した。これに鈴木が納得したため、アーギュメントが切られた。

その後プランエリアへ進んで、質疑応答がなされ Solution へ進む。

政策の実行性に関して、鈴木（東洋３）がアーギュメントを展開した。

内容）医者不足によりターゲットが臓器移植を受けられない。

立論した場合医者の数を増やすっていう前提のもと、原が先にスパイクプランの提案として解釈したときのメリット、デメリットを確認しアーギュメントの検証へと進んだ。ダウトとして、原が医者不足があったとしても臓器移植得られるという意見を提示し、野中がカンファメーションとして（本来は自分の意見のようにも見えたが）各地域単位でみたら、不足してるところと、そうでないところがあるという情報をだして、DA として話されることになった。

その後 AD が確認され、DA として、原、佐渡、鈴木がアイデアを提示して多数決で佐渡（フェリス３）の脳死者の家族が被る害が選ばれ、確認された。

ここまでをおよそ１時間２０分で終わらせ、残りをコンパリに費やした。

コンパリ（１００分）

　野中（立教３）が AD>DA のコンパリアイデアを提示した。

内容）QL　AD は臓器移植を受けられないから死によって多くの物を失う。DA は家族を失うから一つを失う。多くのものを失うという観点から AD の害がより深刻である。

結論）多くのものを失うかどうかという観点でロジックが立論される。

論点１　鈴木（東洋３）のダウト
　　内容）DA の家族もショックで自殺してしまうから、多くの物を失う。

　　原、野中のカンファメーションによって AD=DA のロジックとして話された。これに対して野中がインダイレクトであると指摘したがあまり浸透しなかった。次に原が DA の家族の全てが自殺するわけではないから AD>DA 自体は否定できてないって指摘した。これに加えて野中のカンファメーションにより原のダウトが通った。

論点２　原（立教２）のダウト
　　内容）失うものの量だけでなく質の要素も含めて結論を出すべき。

原の主張や野中のカンファメーションによって質の観点でDA>ADが立ちうるなら、失うものから測るQLコンパリにおいて、その量と質の観点同士を比べる。あるいはそれぞれの観点をつかって何個のロジックが立論されるかで結論を得るという話し方のシェアが行われた。その後、野中の提案によりAD>DAの検証してから話されることになった。

その後、道方の質問でQLコンパリとのつながりは失うものによって多く種類の害を被ることが確認され、野中のアイデアは立論された。

原（立教２）がDA>ADのコンパリアイデアを提示した。
内容）DA＝ 害の度合いが強い　AD＝ 害の度合いが弱い。なぜならDAは家族を失うからであるというアイデアを提示した。

結論）野中（立教３）の反論によりロジックの定義が変更された。

論点　　野中（立教３）の反論
内容）AD=DA　どちらも家族を失う。AD=自分が死ぬ（家族と別れる）　DA=家族が死ぬ（家族と別れる）

野中の反論（カンファメーション）により、原のアイデアが家族を失うことは理解できるが、その度合いがDAの方が深刻であることが判明した。故に定義変更となった。

原（立教２）が再びDA>ADのアイデアを出した。
内容）DA=家族との別れが突然訪れる　AD=突然でない

結論）検証中にディスカッションが終了した。

論点　野中（立教３）の反論
内容１）どちらも突然の別れが訪れるケースある。ADの場合、病気を宣告されてどのくらいまで生存するかは人それぞれ（早い人もいる）

反論が理解された後、原がマンデートの定義を変えるべきと提唱。内容は「マンデートを国民に知らせてから、実際に施行するまでの期間を設ける」である。結論として、変更はされなかった。印象としては、マンデート変更と野中のダウトにどのように関連しているかがテーブルで理解されていないように思えた。ゆえに、別の反論が出され、野中の反論と原の提案が自然と流れた。

内容２）突然でない別れの方が深刻である。別れに近づく期間で深刻性の程度が高まる。

これに対し、むしろ死に近づくことで恐怖に対して準備（覚悟）によって深刻性が下がるっていう意見が出てきたところでディスカッションが終了した。

選定理由

１位　野中（立教３）
　オピニオンプレゼンターとしての役割を果たし、本テーブルで出てきたすべての論点の収束に貢献し、立論、反論、議事進行、他者の発言の浸透等どれを取っても彼女の存在がこのテーブルには非常に大きくそのパフォーマンスを称え１位とした。多くのプレッシャーがある中でも、ディスカッションに対して真摯に向き合った結果であったと感じた。ジャッジ個人としても、今回のランクは非常に価値あるものだと考える。後輩に対して伝えられることもたくさんあると感じたので、これからは教育者として自分の経験を伝えて欲しい。

２位　原（立教２）
　終始懐疑的な視点を持ちテーブルに落とせていた。コンパリでもダウトや反論、意見の提示を行い議論の深度に貢献していた点を評価し２位とした。１位との差は議論の議事進行と収束力であった。これからの課題は、「アイデア→トリート」の意識を持ち続けそれを行うことである。アイデアの提示（ダウト、ロジック）等は適切なトリートを経てテーブルに効果を与えるので、まずは自分のアイデアを自分で落とし込みそこから第三者介入もできるとテーブルの中心を担えると思うのでそこを鍛えつつ、来年の活躍に期待する。

３位　鈴木（東洋３）
　NFC とコンパリソンで反論を提示し、議論の活性化に貢献したことを評価して３位となった。介入量において上位と差があったものの、テーブルへ参加しようとしていた姿勢が好印象だった。論の提示は良かったがそれを自分の力で議論させるアプローチが欲しかった。これからは教育者として、ディスカッションにおいて自分が感じたことを後輩に伝えてほしい。

４位　佐渡（フェリス３）
　DA の立論と疑問を解消するための質問の介入を評価し４位とした。DA プレゼンターとしての役割を果たせたことは良かったが、コンパリでの介入が少なくなってしまったことがもったいなかった。課題としては、コンパリでの介入を見据えてアイデアを提示することである。またエデュケーターとして、自分の経験を是非後輩たちに伝えて行って欲しい。

５位　道方（青学３）
　コンパリソンでの介入を評価して５位とした。コンパリに関しての自分のセオリー感等が発言から見えた。ただ今回のテーブルではかなり長い時間コンパリに費やせたことを考えると、介入の余地がまだまだあった印象である。コンパリでの考え方とかに関してはい

い物を持っていると感じたので是非後輩に伝えてあげた欲しい。

６位　金澤（明治２）
　介入がなかったため６位とした。

　アッセンお疲れ様でした。